



学環  
学府

Interdisciplinary Initiative in Information Studies  
Graduate School of Interdisciplinary Information Studies  
The University of Tokyo

number.

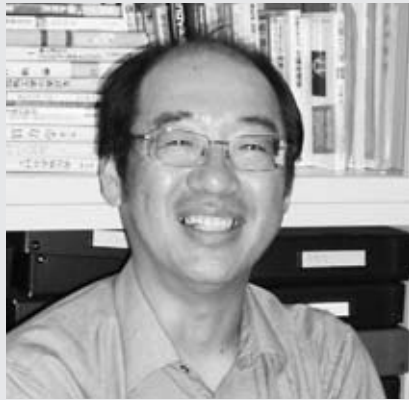
22

# 農学は雨二モ負ケズ風二モ負ケズ…

東大陸上部の十種競技歴代4位の記録をお持ちで、農業土木学を勉強していた学部3年生のときには、火星の凍土の水でコシヒカリを作るレポートを出されたとか。お話は火星からシベリア、ジャガイモ栽培から役人の話と縦横無尽に広がり、まさに情報学環に来るべくして来た先生との印象を受けた。

## Q 農学系から情報学環に いらした先生は初めてですが…

はい。かといって農学を代表しているかどうか怪しいところなので、それは断っておかないといけません。僕は若い頃から、農学系にいながら理学部や工学部の授業を聞きに行ったり、あまり学部を意識しないであちこち行っていましたので、情報学環にも苦もなく、ただおもしろそうだという感覚でやって来ました。そもそも、その道何十年それしかやらないというタイプではないんです。農学というのは十種競技ならぬ雑種競技だと思えますから。つまり、お天気のこと水のことも土のことも地域コミュニティの付き合いも知らないといけません。それらを全部含めてようやく農業の学問が成り立つ。研究だからと言って特定の種類だけに絞っても成り立ちません。



接関係ない苦勞があります。しかも、やっと設置できたと思ったら、虫が入り込んで機器が動かなくなったり、ネズミが線をかじったり、牛が倒したり、農業系のネットワークには実験室のような「優雅さ」はありません。最近の農学系研究は、遺伝子操作で新しい医薬品を作るとか健康にいい食品を作るとか実験室レベルでの展開に焦点が当たっていますが、僕は農学というのはもっと泥臭いもので、現地の人を巻き込みながら「雨二モ負ケズ風二モ負ケズ」という現場の意識を忘れてはいけません。

## Q 農地情報モニタリングシステムとは…

総長統括室の下に地球観測データ統融合連携研究機構というのがあり、僕はそこに農学系代表として加わっています。蓄積したデータを他のデータと組み合わせるとどう役立てていくかというプロジェクトの中で、世界の農地から土壌情報をリアルタイムで集めるシステムを作っています。複数のセンサやカメラがついたフィールドサーバと呼ばれる観測ロボットを農地に設置し、生産現場の映像も気象・土壌のデータもインターネット経由でリアルタイムに集める仕組みです。フィールドサーバそのものはつくば市の中央農業研究センターで生まれた技術ですが、僕は土壌物理学を専門としていたので、土壌水分センサをつけて土の情報を取れるようにしているのが一味違うところです。

「食の安全」ということで言えば、食品にQRコードをつけて携帯でピッと読み取るだけで、その農地の映像がリアルタイムで見られるようにすればいいですね。農業への関心が高まるでしょうし、こういう情報を公開していない農場の作物は買わないと消費者が言ってもいいわけです。作っている側の状況を常に開かれた状態でモニターでき、それで安全な食べ物を手に入れるという流れができると思います。東大の大学生協のハウレン草は100%タイから来ているのはご存じですか。安全なハウレン草を安定供給するために大学生協がタイの山岳地帯に産地を見つけ、そこの農産物を入れているのですが、私はこの農場に試験的にフィールドサーバを置かせてもらって、ハウレンソウの生産現場をモニタリングしています。

(<http://www.iai.ga.a.u-tokyo.ac.jp/mizo/research/fieldinfomatics/>)

## Q 苦勞されることは…

農地にフィールドサーバを置くといっても、暑いタイやインドネシアで、限られた時間内でいかにセッティングして使えるようにするか、現地の人とコミュニケーションをとりながら、どう気持ちよく動いてもらえるようにするかなど、技術や研究とは直

## Q 「農業は実験室で起こっているんじゃない、 現場で起こっているんだ」ということでしょうか…

そのとおりです。僕の大学院時代の研究テーマは凍土で、はじめは実験室の中で土を凍らせて土壌水分のデータを取り、コンピューターシミュレーションでその現象を再現させていたんですが、その後シベリアに行き、実際の凍土を目の当たりにして、いかに自分がやっていたことがコップの中の世界だったかということに気付きました。実際のフィールドにはフィールド特有の問題がたくさんあり、それを考慮した上でコップの中の現象論をやっていかないとはいけません。

東大の新生にジャガイモを一個渡して、駒場から本郷に上がってくる時、それを何個に増やしたかで進振り点を決めたらどうか、などと冗談っぽく提案しています。普通に育てたんじゃ虫がついて収穫できません。その時初めて、なぜ農薬が必要なのか分かります。農薬は全部反対と言っている消費者がいる時代ですからこうした現実をもっと認識することも大切だと思います。もっとも有機野菜が重宝されるのは農薬を使わないで手間をかけた労働の対価なのかも知れませんが、最近はこのせめぎ合いの農業生産を実現するために「ジャストインタイム農業」という概念を打ち出したりもしています。

## Q 役所のご経験がおありとのことですが…

内閣府総合科学技術会議事務局で2003年から2年間役人をしていました。こんなこと言うと御用学者と言われちゃうかもしれませんが、一つの会議の準備のために役人がどれだけ苦勞しているかよくわかりました。マスコミは何かという役人批判をしますが、頑張っている人は不眠不休で本当に頑張っています。いろんな意見をまとめるための高度な調整能力を求められます。いずれにせよ、東大生には目先の損得勘定でなく、こういう時代だからこそ、国の将来を意識しながら勉強してもらいたいものです。わがままに自分の意見を主張する大学教員だった私も、役所経験のおかげで少しは社会人になったような気がします。もっとも逆に人間が変わったと非難する研究者もいますが(笑)。情報学環ではこうした経験を活かしながら、東大オリジナルの「農学と情報」を発信していきたいと思っています。



## 裁判員制度実施を前に事件報道のあり方を問う



5月30日、情報学環・福武ホールで「シンポジウム 事件報道と開かれた司法」（主催：放送倫理・番組向上機構 [BPO] / 東京大学大学院情報学環）が開催されました。裁判員制度の実施を間近に控え、事件・裁判報道のあり方が問われるなか、作家の吉岡忍氏をコーディネーターに活発な議論が交わされました。

かつて『ニュースステーション』でプロデューサーを務めた渡辺興二郎・テレビ朝日取締役報道担当は、事件報道の転換点のひとつとして「ロス疑惑」を取り上げ、現代まで続く「メディア・スクラム」や「犯人視報道」の問題を指摘しました。また、以前「サンデー毎日」編集長を務めた三木賢治・毎日新聞論説委員は、最近の事件・

裁判報道の傾向として、被害者取材に重心が移りつつあることを指摘し、それらが厳罰化の流れに拍車をかけているのではないかと語りました。

こうした議論を受けて、会場にいた最高裁の平木正洋・総括参事官は、マスメディアの事件・裁判報道が裁判員に予断や偏見を与える危険性を指摘。これに対し友井秀和・NHK解説委員は、裁判員制度が始まればむしろ今まで以上に情報開示の必要性が高まるとし、報道を制限する「縮小均衡」ではなく「拡大均衡」を目指すべきだと主張しました。評論家の立花隆氏からも、現在のマスメディアはもっと規制に挑戦すべきだという問題提起がなされました。

メディア法が専門の濱田純一・東大副学長は、個別項目のマニュアル化はすべきではないと指摘。その上で裁判員制度そのものが新しい公共性を作る試みであり、メディアや司法のプロだけでなく、視聴者・市民を巻き込んで議論し、常に見直しをしていくことが必要だと締めくくりました。

その他にも、これまでの事件報道の歴史を振り返るビデオの上映や、光市母子殺害事件報道を調査・検証した小町谷育子弁護士の問題提起など盛りだくさんの内容で、予定時間を大幅に越えて熱心な議論が繰り広げられました。タイムリーな話題で人々の関心も高く、メディア関係者や法曹関係者を中心に260名を超える参加がありました。（准教授・丹羽美之）

福武ホールオープニング記念シンポジウム

## 世界の一元に抗して 文化に何ができるか

5月10日、キドラット・タヒミック氏の強烈な一人芝居から始まった福武ホールオープニング記念シンポジウムは、現在の文化状況を再考する時間と場であった。瀬戸内海の直島や越後妻有のアートプロジェクトをふまえ、世界の一元に抗して文化に何ができるか、地域性や多様性の観点から議論された。オープニングやクロージングの強烈な音楽や身体感覚が影響したのか、地域性や多様性には身体や記憶が極めて深く関わっていることを強く感じ、頭で考えているだけではそれらが分からないことを実感した。このような実感とともに、当日出席できなかった筑紫哲也氏から寄せられたメッセージが心に残った。筑紫氏は、文化が「地域」に依拠し、地域性が引き寄せやすい閉鎖性から自由で、その本来持ってきた多元性、相対主義を保ちうれば一元化に抗する番は無限にあるというメッセージを寄せられた。地域



パーカッションバンドPuriiによる演奏

と世界、そして文化について、頭と身体で考えることができた福武ホールのオープニング記念に相応しい素晴らしいシンポジウムだった。（吉見研D3・三浦伸也）

## 総合防災情報研究センター 設立記念式典開催

6月2日16時30分、外はあいにくの小雨でしたが、情報学環・福武ホールラーニングシアターでは、行政、マスコミ、ライフライン企業、研究者など各界から約160人の列席者が集い、総合防災情報研究センター（CIDIR）の設立記念式典が開始されました。



来賓の泉防災担当大臣

式典は、本センター 鷹野澄教授の司会のもと、吉見俊哉情報学環長、大久保修平地震研究所長、前田正史生産技術研究所長の3部局長による挨拶に始まり、小宮山宏東京大学総長の挨拶、引き続き来賓を代表して内閣府から泉信也防災担当大臣、気象庁から平木哲長官、さらに故廣井教授との親交が深かったJR東日本の石田義雄取締役副会長にご祝辞をいただきました。地震防災対策強化地域判定会会長で中央防災会議委員でもある阿部勝征先生からは「想定東海地震の予知と情報」についてご講演をいただき、最後に田中淳センター長が「センターのミッションと研究」と題して今後のセンターの研究の方向などについて紹介しました。（特任教授・須見徹太郎）

## PROJECT

Interfaculty Initiative in Information Studies / Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo

## メディア表現、学びとリテラシーの広場づくり

メルプラッツ・メンバー、大学院情報学環准教授 水越伸



2001年から06年までの5年間、東京大学大学院情報学環を中心に活動を展開した、「メルプロジェクト (MELL Project)」。  
その成果と理念を継承してスタートしたメル・プラッツ。メルはMedia Expression, Learning & Literacyの頭文字。  
「プラッツ」=Platzはドイツ語で「広場」のことです。はたしてメル・プラッツとはどのような活動なのか。  
そのあらましをお知らせしたいと思います。

## 異種混濁的なコミュニティ・スペースをめざして



メルプロジェクトは、学環設立草創期の2001年、日本のメディアの生態系をより多様性のあるものに組み替え、内外各地に学習やコミュニケーションのコミュニティを生み出していくことを目指して立ち上がった、ゆるやかなネットワーク型のギルド集団でした。学会でもなく、たんなる研究会でもない、このとてもユニークで愉快的試みは、80余名のメンバーが約30のプロジェクトを展開、6冊の本を刊行し、当初の約束通り5年間で終わりました。

それから1年あまり、元メルプロジェクトの有志がふたたび集まって議論を重ね、「MELL platz (メル・プラッツ)」をデザインしました。メルプロジェクトが、メディア表現とリテラシーについての研究プロジェクトの集合体だったのに対して、メル・プラッツは、さまざまな人々によって国内外でおこなわれ、根つきはじめていく多くの「活動」をたがいに紹介しあい、ともに語り考えるコミュニティ・スペースとなることを目的としました。すなわち、メディア表現とリテラシーに関わる様々な「事象」について、その情報を集約する／様々な「活動」を推進していく人々が集う場を提供する／様々な「問題」について提起をし、議論の輪を広げる／様々な「提案」を社会に向けて発信する／メディア表現とリテラシーを考え、実践していくための様々な「手段」を紹介していくこと、です。

## 公開研究会とメル・エキスポ

はじめて約1年、まずメル・プラッツはメディア・リテラシーというキーワードにあえてこだわり、さまざまな領域の実践者、研究者、時にはメンバーも登壇して公開研究会を開催してきました。毎回の参加者は70~80名前後でした。



## 07年度メル・プラッツ公開研究会

- 「メディア・リテラシーの現在の位置：今、メルプロジェクト「東京宣言」を再び考える」(登壇者：石田佐恵子・藤田真文・本橋春紀・水越伸ほか)
- 「メディアを活用して、社会との関わりを築く」(白水繁彦・岸尾祐二ほか)
- 「ジャーナリズムとメディア・リテラシーの対話」(林香里・下村健一ほか)
- 「ミュージアムにおけるコミュニケーション・デザイン～放送とメディア・リテラシー～」(増田朋和・佐藤紀子・宮原美佳・杉本運應ほか)

## ■「“学び”とメディアの間を結ぶもの」

(黒上晴夫・本間直樹・鮫島京一・崔銀姫ほか)

## ■「あらためてメディア・リテラシーを問う」(北村順生・水島久光ほか)

## ■「メディア・エキスポの挑戦：学環えんがわワークショップから考える」(須永剛司・鳥海希世子ほか)

4月下旬には、福武ホールの実質上のこけら落としイベントとして、シンポジウムに相当するメル・エキスポ2008を2日間にわたり開催。のべ約450名の参加者を得て、大好評のうちに終わりました。万国博覧会という、吉見俊哉さんに怒られそうなメタファーを用い、「お祭り広場」にはタイ、英国、台湾などからスピーカーを招き、学環から佐倉統さん、北田暁大さんにもお出ましいただき、5つのパビリオン(マスメディアと市民の回路、グラスルーツ・コミュニケーション、メディアと教育、文化とコミュニケーションのリデザイン、キオスク)には内外から約60の出展者が展示するなど、おおいに盛り上がった2日間でした。



## 運営体制と濃いメンバーたち

昨今、大型研究費や寄付金が頭上を飛び交いますが、メル・プラッツはシンプルに、自律的にやっています。27名の運営メンバー(下記参照)各自が年2万円を拠出。資金的母体はそれだけです(プロジェクトがらみの活動には別途研究費等を使いますが)。ここにはメル・プラッツなりの矜持があります。

メンバーは下記の通り(アイウエオ順)。新聞研究所、社会情報研究所、そして学府で学んだOG/OBたちが多く、現役院生もいます。27名のギルドの長、オーガナイザーは、初代が水島久光さん、二代目が北村順生さんです。



飯田豊・伊藤昌亮・宇治橋祐之・小川明子・加島卓・北村順生・見城武秀・駒谷真美・境真理子・坂田邦子・砂川浩慶・高宮由美子・崔銀姫・土屋祐子・鳥海希世子・長谷川一・林田真心子・古川柳子・ペク・ソンス・松井貴子・水越伸・水島久光・宮田雅子・村田麻里子・本橋春紀・山内千代子・劉雪雁

詳細は<<http://www.mellplatz.com/>>、  
お問い合わせは<2008@mellplatz.com>までお願いいたします。



## 中国有力二校と 学術交流協定締結

情報学環は上海交通大学媒体与设计学院、ならびに復旦大学新聞学院と学術交流に関する協定書および覚書を取り交わした。6月4日、5日、吉見学環長が両校を訪問し、正式に調印した。

上海交通大学媒体与设计学院は、中国最新鋭のメディアとデザインの教育及び研究の機関である。一方の復旦大学新聞学院は、1929年の創立以来、過去約80年に渡って中国国内の同分野の代表的研究者および実務家を輩出してきた伝統ある組織だ。

両校との学術交流をおとして情報学環は、学際的な情報メディア文化研究全般をこれまで以上に強化していく予定である。(准教授・林香里)



## 入試説明会開催

6月21日午後12時に2009年度の大学院入試説明会が福武ホールで行われた。説明会参加者は過去最高レベルの288名で、会場は補助椅子も全て埋まるほどの満員となり、文字通り参加者の熱気に満ちた。

最初に登壇した吉見学環長の講話は気迫がこもり会場は厳粛な空気に包まれていたが、続く池内専攻長は冗談で雰囲気や和らげた。次いで各コース長による各コースの紹介がビデオによって上映された。座談会では本年度末で定年になる原島教授とOG大瀧さん、OB藤江さんが登壇した。学環・学府での経験談は参加者にとって参考となるだけでなく、三人の会話そのものが魅力的であった。

後半は休憩をはさんだ後、学生やOBの視点から学環・学府について述べたビデオの上映と、統計資料に基づき学府学生の出身大学や就職先などの情報が提供され、石崎准教授・暦本教授により入試出願についての解説が行われた。入試説明会の最後は、恒例の学環・学府めぐりで、30以上の研究室が出展し、未来の学府を担うかも知れない学生たちとの知的交流に努めた。(准教授・前田幸男)



## 学際理数情報学シンポジウム開催

学際理数情報学コースは、5月25日、福武ホール・ラーニングシアターにて、「知の熱帯雨林」と題し、第2回学際理数情報学シンポジウムを開催した。五月祭当日ということもあり、本学の学生、教職員だけでなく、学外からの参加も得られた。

シンポジウムでは、池内克史学際理数情報学コース長によるコース紹介の後、第1部では各教員による研究テーマの紹介を行った。第2部では、「学際理数情報学の挑戦!」と題して、原島博教授のモデレートのもと、荒川忠一教授、池内克史教授、河口洋一郎教授によるパネル討論が行われた。学際理数情報学コースに関係する研究テーマは、視覚、映像、アート、シミュレーション、空間、ロボット、バイオ、コミュニケーションと多様で、まさに多様・多彩な動植物の共生・共存によって築き上げられた熱帯雨林の如く、めざすべき学際理数情報学コースの新しい姿について熱い討論が行われた。第3部の研究室めぐり、その後の交流会でも、参加者と関係者との間で活発な議論が行われた。(講師・小川剛史)

## 中国報道テーマに 〈メディア研究のつどい〉開催

林香里研究室主宰の「メディア研究のつどい」が5月28日、福武ラーニングスタジオで開かれ、共同通信外信部の中川潔さんが「苦悩する中国のジャーナリスト／中国報道の面白さと難しさ」と題し、中国の記者たちの奮闘ぶりを報告、100人近い参加者たちと議論を繰り広げた。

中国の人々の暮らしはいま、北京五輪を目前にしたナショナリズムの高揚、地方政治の腐敗、都市の格差拡大などいくつもの変化にさらされている。ジャーナリズムも例外ではなく、現場の記者たちは旧来の「共産党の喉舌」から「人民の喉舌」に生まれ変わりつつある。中国特派員歴9年の中川さんは、そんな中国記者にエールを送るとともに、日中間の「不信」を克服のためジャーナリストや市民レベルの交流や討議の重要性を強調した。

チベット騒乱や聖火リレー騒動のニュースが連日報じられている中でもあり、学府生のほか他学部、他大からの参加も多数あった。(林研D2・畑仲哲雄)

## 「アニメがみる未来～ コンテンツが拓く将来～」開催

コンテンツ創造科学産学連携教育プログラムは、表記のシンポジウムを3月8日に東京大学経済学部1番教室で開催した。このシンポジウムでは、「コンテンツは単なる芸術の商業化ではなく、豊かな社会をもたらすために必要な創造性を社会に育む土壌となる」という主旨のもと、科学技術とコンテンツの相互関係について学際的な議論を

行った。当日は約300名の参加者を集め非常に活気あふれたシンポジウムとなった。(特任講師・中村仁)



## 「ハリウッド映画に見る 最新映画ビジネス戦略」開催

5月27日、福武ホールにてコンテンツ創造科学産学連携プログラムの講義「映画産業論」の一環として、表記の特別講義・シンポジウムを開催した。当日はソニーピクチャーズエンタテインメント映画部門日本代表の佐野哲章氏ならびにバラエティ・ジャパン編集長関口裕子氏をお招きし、映画の製作・配給・宣伝・興行に関して映画「ラストガスをぶっつぶせ」をケーススタディとして、ハリウッド映画が日本へ届けられるプロセスとその戦略について議論を交わした。福武ホールは満員となり、参加者からも好評を博した。(特任講師・中村仁)

## 「キャラクターライセンシング ビジネスの挑戦：～キャラビズに イノベーションは起きるか?～」 開催

5月30日、工学部2号館213講義室にて、表記のシンポジウムを開催した。この取り組みはキャラクターライセンシングビジネスに関わる研究者と実務者が共同で行う、情報学環の教員を中心とした結成されたキャラクタービジネスに関連した教育・研究プロジェクトの一環として開催された特別講義であり、当日は、学内外から約300名が参加し、登壇者により問題意識やプロジェクトの概要、キャラビズの将来などについて熱く議論が行われた。終了後は懇親会が行われ、参加者間によるコミュニケーションが図られた。(特任講師・中村仁)

## 制作展 iii Exhibition 9 開催

6月19日から24日にかけて、学生によるメディアアート制作展 iii Exhibition 9が開催された。本展は、科学技術と融合した芸術の新しい表現を学生の手で発信することを目的に、学際情報学府と情報学環コンテンツ創造科学産学連携教育プログラムの合併授業の一環として行われている。

第9回となる今回は、出品数が22作品と、過去最大規模であった。また、この春に竣工した情報学環・福武ホールのテラスにも3作品を展示し、学際情報学府の入試説明会にあわせて作品を用いたライブパフォーマンスを行

うなど、新たな試みが行なわれた。1100名以上の来場者を迎え、たいへん活気のある展示となった。

次回制作展は12月上旬に開催予定。詳細は制作展Webサイト (<http://i3e.iii.u-tokyo.ac.jp/>)にて。(石川小室研M2・石川貴彦)



## 受賞報告

### 文部科学大臣表彰 若手科学者賞 受賞

田中久美子准教授と苗村健准教授が平成20年度文部科学大臣表彰若手科学者賞を受賞した。受賞式は平成20年度(第49回)科学技術週間特別行事の一環として、4月15日、虎ノ門パストラル(東京・虎ノ門)で行われた。

田中准教授の受賞対象となった研究は「言語統計に基づく予測を利用した文書入力方法に関する研究」。かな漢字変換を一般化し、予測機能を利用する入力ソフトウェアのための数理的基盤を提案した。この成果は、日本発の技術基盤に根ざし、未来型機器類で万民が利用可能な入力方式として発展することが期待される。

苗村准教授は「学際分野における実世界指向メディア技術の研究」で受賞。光学現象とソフトウェアの利点を高度に融合した着想が高く評価され、今回の受賞となった。本研究の成果は、実世界に根ざした、人に優しいメディア技術とそこに展示されるコンテンツ研究の両立により、心豊かな社会を築く技術基盤を切り拓くものと期待される。

### 国際会議

#### Digital Humanities2008 Bursary award 受賞

鈴木崇史(田中明彦研・D3)は、6月「人文科学とコンピュータ」に関する世界最大の国際会議Digital Humanities2008(Oulu)で、若手の優秀論文に与えられるBursary awardを受賞した。田中明彦研究室で公開しているデータベース「世界と日本([www.ioc.u-tokyo.ac.jp/worldjpn](http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/worldjpn))」を利用し、機械学習を政治テキストの社会言語学的分析に応用したことが高く評価された。

### ニュースレターの表紙デザインを集めた 学環ポストカード



赤門横  
コミュニケーション  
センターで  
好評販売中!

【東京大学大学院情報学環・学際情報学府】

# 学環学府

Interfaculty Initiative in Information Studies

Graduate School of Interdisciplinary Information Studies

The University of Tokyo

number.

22